



サイケデリック  
コウイシヨウ

このまじのまじ

NoChime

うだるような夏の暑気をかきたてるように、  
ミンミンと蝉が鳴いている。  
蝉が鳴き叫ぶのは求愛行動らしい。



異性に向けて、自分はここにいると主張しているのだ。  
セックスがしたいと、心が叫びたがってるんだ。  
僕だってそうだ。

「今日も暑いわね、コノツ君！」  
口ではそう言うものの、暑さを物ともせず凜とした  
格好良いポーズで店先に佇むその女性は、わざわざ叫び  
知らせるまでもなく、余りある存在感でその美貌を  
雌雄問わずに誇示していた。



「さっしやい、ほたるさん」

「突然だけど、ココノツ君。  
あなた、催眠術を知っているかしら？」  
「え？それはまあ、おおよそは…」

「実は私、催眠術が得意なのよ。  
そこで、ちよつと実験に付き合わない？」

「いいですけど…」

「話が早くて助かるわ」



そう言ってほたるさんがポケットから取り出した物。  
それは……

「この五円チ○コをじっと見つめなさい」

誰でも知ってる一番初歩的な奴だ。

しかも五円玉じゃなくて五円チ○コだけで  
それで効果あるんだろうか。

色々と思うところはあったが、黙って従う。

左右にゆらゆらと揺れる五円チ○コを凝視していると、  
厳かな声色でほたるさんが繰り返し囁く。  
「あなたはだんだん…」

「駄菓子屋を継ぎたくなーる」

えええええええーっ!!!?



それが狙いだっただのか!  
でもほたるさん、そんな催眠術なんか  
僕はかかりませんよ!

「おかしいわね、この本の通りやったのだけど…」  
そうぼやきながらほたるさんが開くのは、  
何やら怪しげな催眠術の入門書であった。

「貸してみてください。今度は僕がやってみますよ」

糸付き五円チ○コを受け取り、振り子の要領で揺らす。ちよつとワクワクした顔でほたるさんがそれを見つめている。その美貌とは不釣り合いに無邪気で面白い。

「あなたはだんだん…」

言いかけて、何と暗示をかけるべきか思いつかず言葉に詰まる。もしも本当に催眠術にかかったら…？馬鹿馬鹿しい。そんなことあるはずなのに。あるはずないと思っているのに、脳裏によぎるのは、ノンアルコールのはずなのに何故か生○きビール飲んで酔っ払ったほたるさんの姿だった。ありえる…！この人なら…あっさり催眠術にかかる！しかし、あまりにストレートな要求を口走って失敗したら嫌われちゃう…！





「あ、あなたはだんだん…意識が朦朧になる…」

「……」

「な、なーんちゃって…」

「……」

ほたるさんは無反応だ。  
どっちだ？これはどっちのパターンなんだ…？

「ふわぁ、ここはろこ？」

「なんだか…ぼんやりするわ…」

「かかったっぽい！」

どうしよう。本当に成功してしまった。  
これはやりたい放題じゃないか。据え膳食わぬは  
男の恥とも言っじゃないか。でも、いいの  
か？  
本当にこれでいいの  
か？  
良心の呵責を感じて胸がざわつく。

そんなことしちゃいけない。当たり前じゃないか。  
その一方で、おっばい  
が大好きな気持ち  
が溢れ出て止まら  
ない。おっばいへの愛が止まら  
ない。

テレビの男が言う。これでいいの  
だ。これでいいの  
か？  
だがしかし、だが  
しかし……！

仮に、ことが済んだ後、ほたる  
さんがこの実情を忘れてく  
れているとは限らない。もし  
覚えていたら？  
おっばいが好きだ。一時の衝  
動で一生を棒に振るのか？  
ならば、この機を棒に振る  
のか？  
ああ、もう訳が分からない  
！

「そうだ！」  
その時、天啓が閃いた。  
しかし、アレは一秒くらいし  
か持たないし……  
そうだ、だったらいつそのこ  
と……！

これが僕の、たったひとつの  
牙えたやり方だ――！

「ほたるさん……！」  
「え？」



「そ、そんな…」



「ええええええええーっ!!？」

ほたるさんがめっちゃくちゃ驚いてる。  
いや、冷静に考えるとダメだるこれ！  
完全に変質者じゃないか！



「ポッチ君…実在していたなんて…」

ええええええええーっ!!!泣いてるーっ!!!  
何でこれで引つかるんだ!催眠術すげえええ!

「や、やあ、ほたるさん!僕、ポッチくんだよ!」  
「ポッチくんはそんなこと言わない」  
ええええええーっ!!!!

「あら、ポッチくん、大変!  
何だかそこが腫れているわ!」  
「え!!!あ、これはっ!」

気付くと、僕の下半身はギンギンに怒張っていた。

「すぐに治療しなきゃ!失礼するわよ!」  
そう言っでパンツを下される。すごく恥ずかしい。



「まあ、ポッチくんのここに…  
お〇つカルパスがついているわ!」  
「……」

…まあ、さっきはギンギンって言ったけど  
これはまだ完全体の半分くらいだし。  
本気を出せばこんなもの…!!

「はあっ!」  
気合を入れてほたるさんのパンパンに張ったシャツの  
胸部を凝視する。

愛のままにわがままに、僕はそのわがままボディに  
釘付けになる。そして右手で僕のお〇つカルパスを  
擦りあげる…!!

「あ、ああ…!ポッチくんのカルパスが…!!  
擦れば擦るほど色が変わって…!!  
こうやってつけて…!!」





「大人のチ○コバットよ！」

「これはもうお○つカルパスじゃない…  
チ○コバットA…いえ、ただのチ○コバットじゃないわ」

「でかいっ！」

てーれってれー

「ほ、ほたるさん！」

辛抱たまらなくなつて、なりふり構わずに

僕はほたるさんに背後から抱き着いた。

「ど、どうしたのポツくん……!? 息が荒いわ！」

力を込めたら折れてしまひそうな華奢な腕、柔らかい

皮膚の感触。間近でみる整った横顔、

ふわりと鼻を掠める髪の毛の匂い。

「ハア……! ハア……!」

……これからどうしたらいいんだろう。

届きそうもないと思つていた仄かな憧れに、  
思わず手を伸ばして、触れて、手中に収めて、  
そして途方に暮れた。

「ええい！」  
構造もわからず、力任せにはたるさんのシャツを  
引っ張ると、ボタンがはじけ飛んで二房の大きな  
た○ごアイスがこぼれ出た。

「ぎゃあ！」  
ほたるさんが驚いて、小さく悲鳴をあげたが、  
僕の耳には届かない。  
頭の中がおっぱいでいっぱいになって、他の事を  
考えるリソースが不足していた。

雪○大福のように白い肌、マシユマロチ○「まんの  
ように弾力のあるふわふわの感触。  
僕は、人一倍おっぱいが好きなのだった。



シャツがダメになったことを嘆くほたるさんに  
懇願して、お尻を向けてもらう。

「ポツチ君：こ、これでいいのかしら」

突き出されたスカートを巻く仕上げで、生唾を  
飲み込む。

以前、一度だけチラツと見たほたるさんの下着を  
こんなにまじまじと見るのは、不思議な体験だった。

でも、今はこの先に進まなきゃいけない。

この薄い布地の向こう側に眠る、前人未踏の

ミライカナイへと辿り着かねばならない。そして、

秘境の源泉を掘り当て……つまりそのなんだ。

濡らさなきゃいけないんだけど、どうすりゃいいんだ。

漫画でよく電気マッサージ機を当ててるけど

うちにそんなもの無いし、何かないか。

こっ、長い……棒状の、何か棒状の奴。



「ああつつんっ！」

よくわからないから、その辺にあつた棒状のものを  
片っ端からほたるさんの中に刺し通す。

うま○ぼうの包装の先端が膣内の壁をこそいで進むと、  
その刺激で身体の底から欲情の波が湧き上がり、

ほたるさんの唇から喜悅の叫びが漏れ出した。

うま○ぼうが美味い棒から上手い棒へと変貌を  
遂げたのだ。

誰か誰か僕にもっと棒をくれ。き○こ棒じゃダメだ。  
細すぎるから。

もっと、もっと、わ○パチのように刺激的な棒を！



ようし、こいつに決めた！  
「いっげええっ！」

ルイス・キヤロルの白兔も悦びそうなほどの  
大きなに○じんを突き立てる。

「ふわっああっんっ！ うっっ……」

衝撃にマールールの蓋が外れて、色とりどりの  
おはじきが溢れ、零れ落ちた。





時は満ちた。

儀式の準備が整い、いよいよひとつになる。

狙いを定め、ほたるさんが腰を降ろすと、未だ収まりどころを知らず天を仰ぎ大きく反り立つ僕の  
○ン○ンつけポルが入口に触れ、そのまま体重に任せて  
膣内へゆっくりとインサートされる。

「んああ……あああ」

嬌声が脳髓を揺さぶる。○ン○ンつけポルで

アシアン喘ぐ。

全神経を股間に集中させ、大人になったチ○コバット  
でほたるさんを感じる。



ほたるさんの額にじんわりと脂汗が滲んでいるのが  
見て取れる。

「ほたるさん、痛む？」

「っは……少し……でも平気よ」

そう言って微かに笑う。呼吸が荒い。息を吸うたびに胸部の二つのボールが弾み、先端のアポの・チヨコレートが上下に軌道を残して揺れる。艶かしい。

「動くよ、ほたるさん」



「あああつううんっ！ ああつあつああ」  
ほたるさんの肉壁がぎゅぎゅうにバッドを包み込み、  
ゆっくりと咀嚼する。  
その度に快感の波が腰全体へと伝播し、僕の頭の中は  
パチ○チパニツクになっていた。

「うああ！ほたるさん！ほたるさん！」  
「ああつううああつあつあつあつ！」  
ポツチくん！ああつ」

パンパカパインと脳髓にファンファーレが駆け巡り、  
僕のバットの先端が爆発して大量のモ○ツヨフルーツ  
ヨ○ールがほたるさんの膣内に叩きつけられた。



「ああ、みんな来てくれたのね。いちっしゅい」

「うわ言のようにほたるさんが眩く。目の焦点があつていない。幻覚を見ているのか？」


「う〇えもん……！いつのまにか愛称が公式で使われるようになったう〇えもん！何か道具だして！」

（うふふふ。まったくほたるちゃんはしかたがないなあ）  
ぱぱぱ ぱっぱ ぼろーん  
（うま〇ぼうろ）

「まあ、う〇えもんのうま〇ぼうろは馬並ね」

「一体何が見えてるんだ！」





ぶく〇くたいやひらめが舞い踊る。  
気付けば、まるでここは竜宮の城の様だった。  
月日のたつのも夢の中、永遠の夏が続く。  
快楽の海に沈む。性急で安易な性関係に溺れる。

「あああ……あつあ……っ」

ほたるさんがよがると興奮する。  
だが、これは果たして愛と言えるのか。  
間違いなく好きはずなのに、こうして肉欲のまま  
性を貪るこの行為を、愛と言えるだろうか。  
下劣な、だまし討ちの行為に意味があるのか。  
どう言いつくろつても許されるはずもない。  
今はただ、腰を振る。

「あら、御機嫌よう。はじめまして」

何処を見ているのか、ほたるさんが挨拶する。  
本当に何が見えるんですか。やめてください。  
怖いですよ。

「よかったら」

言霊は続く。

「あなたも こっちに 来て」

一緒に

「楽しみましょうよ」

判然としない。現実と空想の境界が喪われ、  
ついでに処女膜も喪われて声もでない。  
(ああっふわっあっあ……あ)

耳の奥で反響する喘ぎ声。

ア……ア……ア……聞こえますか。



チュパチュパと、チュツパチャツツの音を立ててピストン運動をする。

これだけ運動すればたくさんカロリーを消費したに違いない。いつだったか、セックス一時間分のカロリー消費は、三十分のジヨギングを行った場合と同等との研究結果が発表されていた。

もうどれくらい走った事になるだろう。

抜き差しするたびに、僕のバットの先端のかりんとうが肉壁に擦れて神経に電気が走る。

「ああつふわっああ」

鈴の鳴るような心地よい声。独りのケダモノとして充足感を得る。

チュパチュパチュパ、下の回で淫靡な泡音が立つ。性のアンサンブルだ。



甘い香りにクラクラする。どうして女の子ってこんなに  
良い匂いがするのだろう。

きつとサ○マ式ドロップスを頭の上からひっくり返したのだ。  
フエロモンと呼ばれる、そんな中ヤシデイの誘惑に嬌然として、  
腰の動きが速まる。

「あぁんんっ！っあぁっあぁんんっ！あぁっうっうっ」

ほたるさんが声が引きつれる。感じているのだ。

息も絶え絶えに、腰を振る。サ○マ式ドロップスの香りで  
セックスがハツカドール。

快楽を分け合う。

「あぁんんっ！っうっうっうっうっうっうっ」





「ああああっ……！」  
ほたるさんが痙攣し、膣圧がきゆうきゆうに強まる。  
何度目かの絶頂。

これでもかかってほど、カノジヨの中に叩きつける。  
何度も、何度も、これで打ち止めかと思うほど搾り出すのに、  
不思議とヨー〇ルは無尽蔵に生成される。

きつと、僕のキャン玉袋にはヨー〇ルの生産工場があるのだ。

そうか、だからモ〇ツヨ〇ルなのだ。  
モ〇ツヨのフランス人医師は、だからキャン玉袋を切除するのだ。  
きつとそうだ。だから像のマークなんだ。  
モ〇ツヨは性産工場なのだ。



たくさん出しすぎて、あたり一面モッコラルーツ  
ヨールの海だった。ここは地中海。

「ああ、良いわ！ポツチ君！愛してるわ」  
ほたるさんが夢見るような口調で愛をささやく。  
ポツチ君宛ての愛。僕では無い。

「クソ！クソ！こなくそ！」

何がポツチ君だ。こんなの、ただの勃起君じゃないか。  
半ば八つ当たりで激しく腰を打ち付ける。  
ほたるさんの中に埋没した大人の証が凶器と化す。

「やっ、んんっ！うううあっあ、

ポ、ポツチくんあううう、はげしっ」  
大人のチッコバットのようなもので何度も膣内を

殴打され、よがる。

クソ！クソ！おどりゃクソ森！クソ！

何度も何度も腰を打ち付ける。己を叱咤する。

情けない自分を責める。

ギギ、ギギギ…と、古い木造の壁が軋んでいる。



あの日の憧れが今、両腕の中で踊っている。  
「……あつんんっ！あんんっ！……あふわっ」

感情が溢れる。快樂と悦びと、そして悔しさが混ざりあつて、練ればふわふわの色が変わって、僕の頭が頭がくるくろぼーゼリーだった。

「ふわっん……うううあああつあううう」  
官能的な嬌声に悩殺され、僕の下心を奮い立たせる。後ろめたさもまた倒錯的で、それすらもそそることに

氣付いて、罪の意識に苛まれる。  
「ああ、僕は……なんてことを」  
背徳感に溺れる自分に、倫理を放棄し都合よく

性的倒錯を盛りながら胸の高鳴りを抑え切れないうでいる  
自分に勝手に絶望し、勝手に涙がこぼれた。

「ああ、うわああ……」

「大丈夫よ、何も怖いことはないわ」  
ほたるさんが優しく励ましてくれる。  
それは、僕がポツ子君だからでしかないのだ。

「心配ないわ、ココノツ君」





「コノツグー？」

聞きなれた少女の声で名前を呼ばれた。  
振り返ると、そこに立っていたのは  
幼馴染の女の子、さやちゃんだった。



「うおおおおおー!!!」

あまりの状況に驚いたさやちゃんは  
脱兎のごとく駄菓子屋から駆け出した。



「ヒューッ」

「あわわわ」

「ち、違うんだ! さやちゃん! これは違うから!  
そんなんじゃないから! まじで違うから!」

「ひええええ! 追いかけてきたーっ」



最高にハイって奴だった。

さやちゃんに追いつき、二・三発ほど殴られ、落ち着くように説得し、この事態をどうしたものかと思ってもじやない精神状態で逡巡し、もう犯すしかないと思いついた。

完全に心身を喪失していた。

「いいかい、さやちゃんこの五円チ○コをよくみるんだ」  
「…その声、え？コノツツなの？」

「…さから、五円チ○コを見るんだ。いくよ」

——これでいいのか？本当に？

ゆらゆらと五円チ○コをゆらし、こう告げた。

「お前はボクの恋人になる…恋人になる」

「え？」

さやちゃんが驚く。この反応…失敗したのか？いや、簡単にかかったほたるさんが異常であって、これが普通なのだ。どうする？どうすればいい!!!

「……」

「え？」

「こ、恋人になるよ」



すごい。僕には催眠術の才能があるのかもしれない。  
ワシヤワシヤと騒がしい蝉の声も祝福してくれている  
ようだった。

ここは暑い。さやちゃんの顔が赤いのも、  
この暑気にやられたからだろう。

右手にぶら下げた五円チ○コがほんのり溶けはじめて  
少し歪んだ。

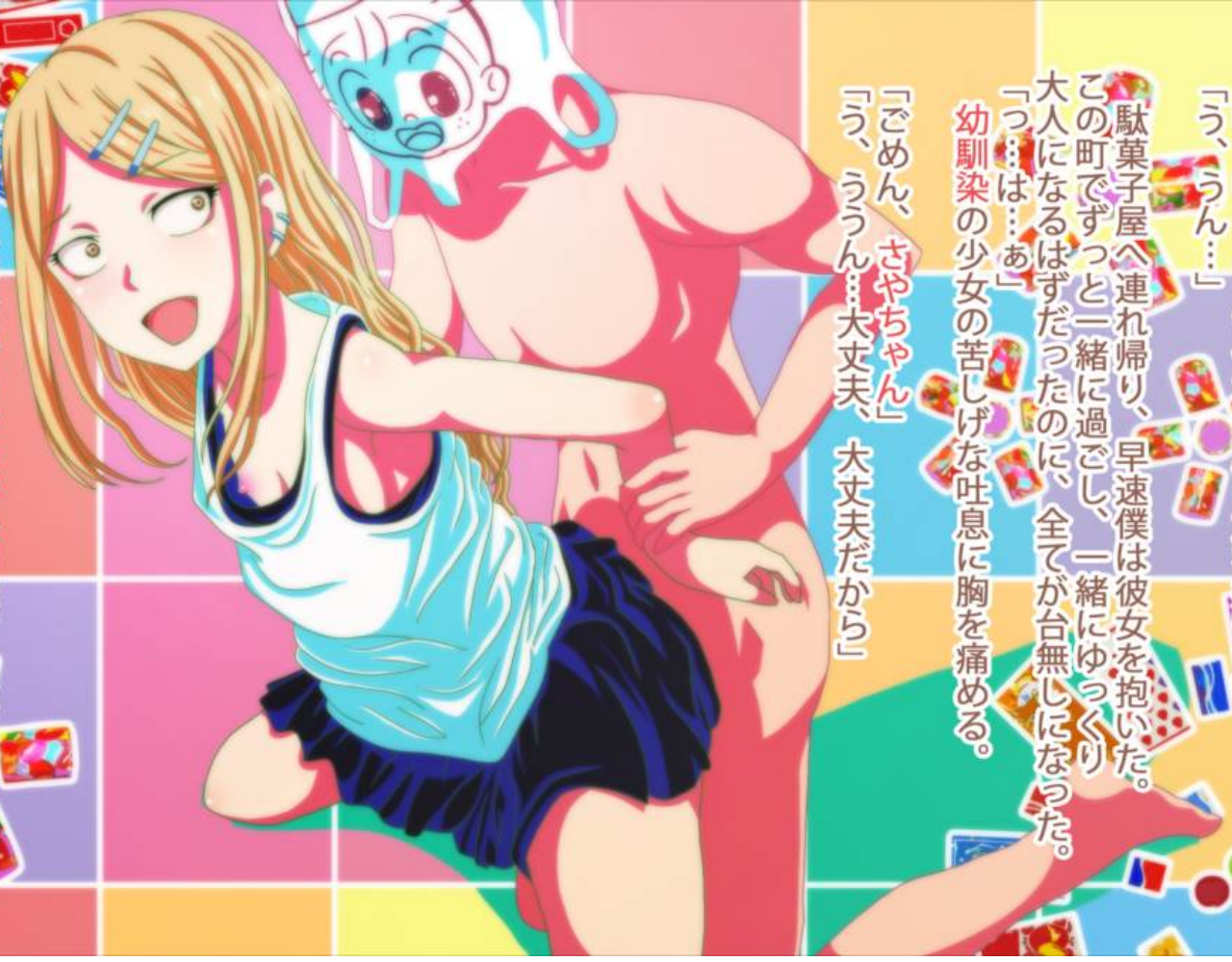


「い、いくよ、さやちゃん…力を抜いで」  
「う、うん…」

駄菓子屋へ連れ帰り、早速僕は彼女を抱いた。  
この町ですつと一緒に過ごし、一緒にゆっくり  
大人になるはずだったのに、全てが台無しになった。  
「っ…は…あ」  
幼馴染の少女の苦しげな吐息に胸を痛める。

「ごめん、さやちゃん」  
「う、うん…大丈夫、大丈夫だから」

言動とは裏腹に、さやちゃんの表情が強張っている  
のが見て取れる。細い腕、白い恋人のように白い。  
もう、後には引き返せなくなっていた。  
せめて、気持ちよくなってもらいたい。



恥らうさやちゃんの顔、熱を帯び頬を染め、さ〇ら大根のように赤い。

「動くよ」

できるだけ優しく聞こえるように、残酷を宣言する。ゆっくりと腰を突き出し、たっぷり時間をかけてさやちゃんの最奥へと進む。

「うんん…っ」

絶え絶えの呼吸が彼女の辛さを物語る。さやちゃんの弱い部分を探り当て、攻める。

「……あふわっ」  
わずかに、しかし確実に、その吐息は甘くなつていった。



その体勢のままさやちゃんを抱き倒し、四つん這いにさせて自然とお尻を突き出す格好になる。

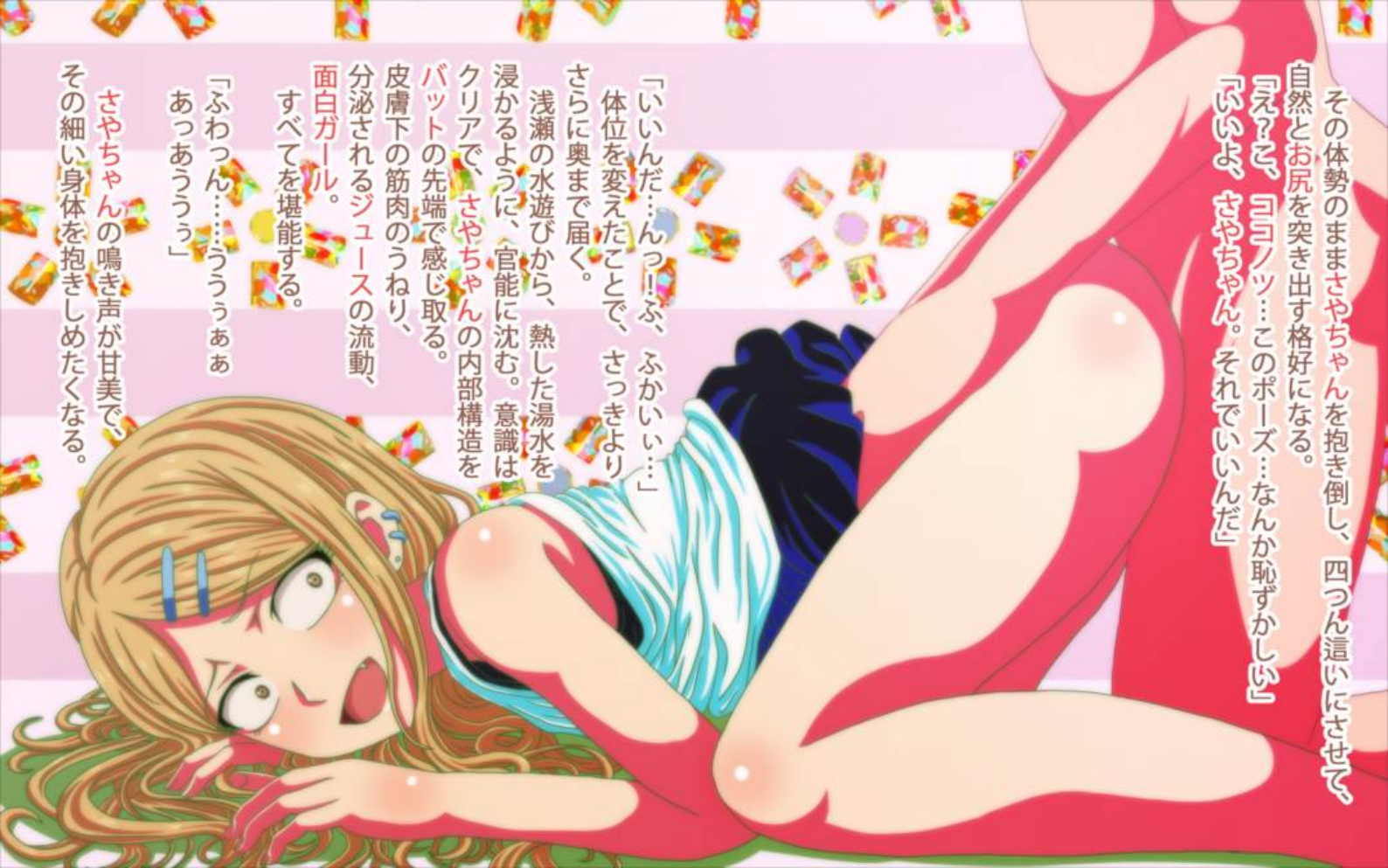
「え？？」、「ヨソツ…このポーズ…なんか恥ずかしい」「はいよ、さやちゃん。それでいいんだ」

「いいんだ…んっ!!ふ、ふかしい…」  
体位を変えたことで、さっきよりさらに奥まで届く。

浅瀬の水遊びから、熱した湯水を浸かるように、官能に沈む。意識はクリアで、さやちゃんの内部構造をバットの先端で感じ取る。皮膚下の筋肉のうねり、分泌されるジュースの流動、面白がる。

すべてを堪能する。  
「ふわっん…うううあぁ  
あっあううう」

さやちゃんの鳴き声が甘美で、その細い身体を抱きしめたくなる。



「はあ、はあ、さやちゃん、いくよ！」  
再生産されたヨー○ルがポンプ式にせりあがってくるのを感じる。  
銃口はさやちゃんの最深部。0距離射撃のダイダロスアタックを  
敢行する。

「出すよ、出すよさやちゃん！」

「え？出すって…え、中に？」

いや、まってまって

さやちゃんが慌てた様子で静止するが、  
精子は突然静止しない。

今更やめられない止まらない。  
エビソリに腰を突き出し、  
やれやれ僕は

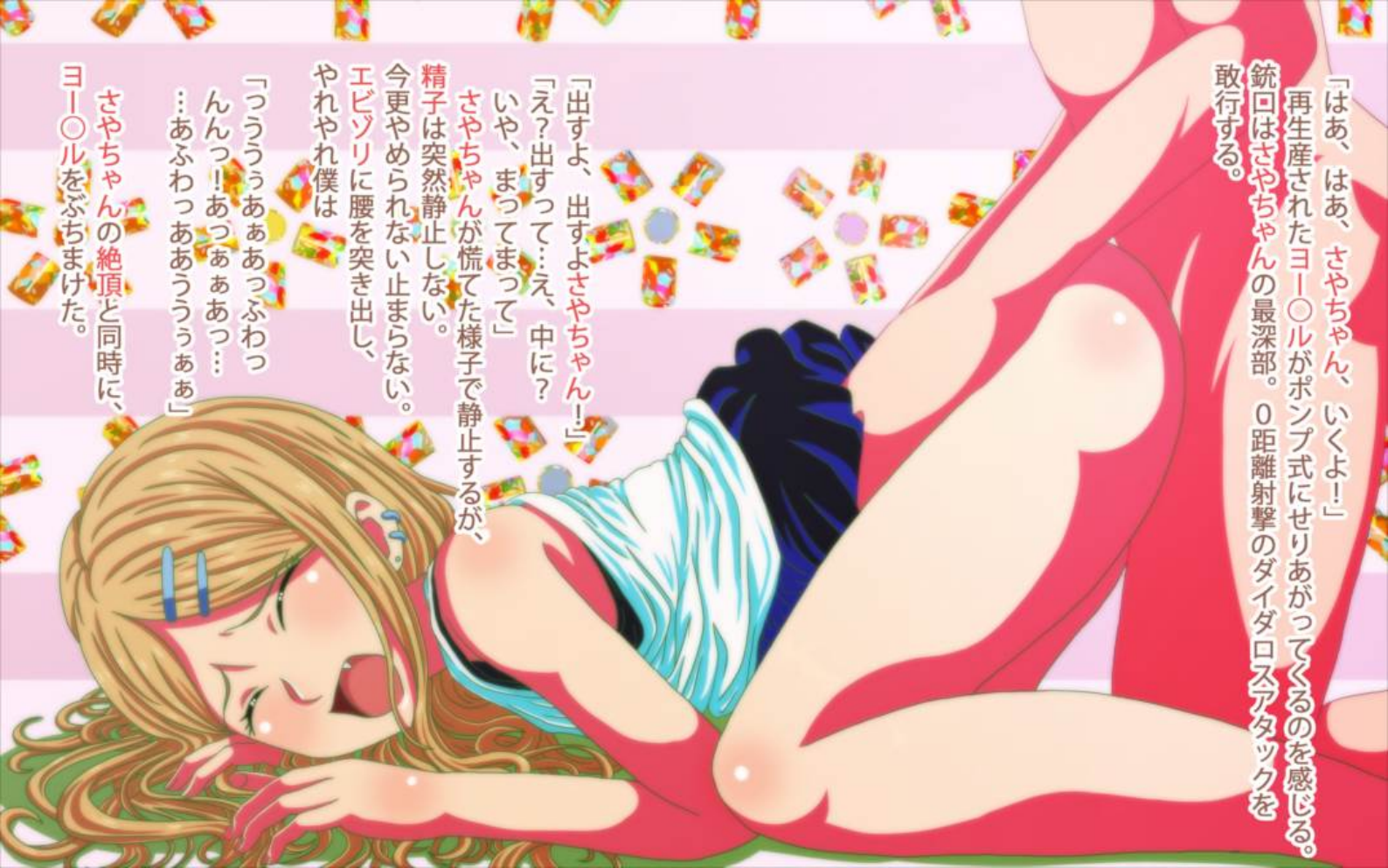
「つうつうあああつふわっ

んんっ！あつあああつ…

…あふわっああうううああ

さやちゃんの絶頂と同時に、

ヨー○ルをぶちまけた。



「うう……ひどいよコノツ……」  
ごめん、さやちゃん、さやちゃんの中が気持ち  
よすぎて止められなかった。  
「ん……そ、そうなんだ……」  
今度はさやちゃんが上になってよ。  
「えっ……まだ続けるんだ」  
うん。  
「……わ、わかった……」

すごい。何もかもが滞りなく順調に推移してる。  
これも催眠術のお陰なんだろうか。  
これでいいのかな。

「うん……あぁッはぁア……」

さやちゃんがゆっくりと腰を沈める。

ぎこちない仕草で、うまく僕の子○コバットが  
入らないのか、何度も行き止まり、軌道を修正して  
腰を前後する。

ただとどしく、それがたまらなく愛おしく感じてきて、

子○コバットが充血する。

「ど、どうか、コノツ」

たどたどしく、前後に局部を擦り付けて揺れ動く。その華奢な腰周りが倒錯的で妙に情欲を掻き立てた。

「い、いよ、さやちゃん」

「ううう……んっ!!」

か細く呻く。彼女の不安が伝わって、なんとか励まそうと、手をとった。

汗ばんで、ぴったりと吸い付く手のひらの皮膚接触で僕らの気持ちは伝わっているように錯覚する。もともと、ひとつの生き物であるかのように、だ。

見上げると必死に腰を動かす健気な姿に、はだけた、薄い胸部。見事な、それは見事な……西部劇の舞台になりそうな大平原と、こざ○ら餅がそこにあった。

「今、失礼なこと考えてた。だろ」  
「えっ」



結合したまま起き上がり、今度は僕が上になる。

「ま、まだするの？」

当たり前前田のク○ッカード。体力は消耗し、お互いに息が上がっていたが、離れたくなかった。ひとつのままでいたかった。

幾度も腰をすりつけ、嬌然とした彼女の四肢に触れ、ただ一人の女の子の身体を堪能する。幼い頃から知ってる、一番近くの少女。

いつだったかのお医者さんごっこを思い出す。

今は薬はないけれど、ここに立派な注射器があるのだった。



「んんっ！んんっ！んんっ！あ……あっああっ」

脳がとろけそうになるくらい、さやちゃんの嬌然とした喘ぎ声が耳になじむ。執拗に腰を打ち付ける。もっと聴きたくて、

さやちゃんの奥の細道を何度も往復する。行きかう

チ○コバットもまた旅人なのである。

長い月日を共に過ごしてきて、さやちゃんの中が

こんなになつてゐるなんて知りもしなかった。

知ろうとも、しなかった。

知るのが怖かったのだ。

もう、僕らの子ども時代が終わってしまった

いることを

「ああっんんっ！あふわっんんっ！ああっあふわっ」  
ビクビクと細かく痙攣して、幾度目かのオーガズムを  
終えた。







「えっ！ちよ、そっちの穴は…ええっ!!」  
「さやちゃんが慌てふためく。それもそのはず、お尻の穴に  
挿し込んだからだ。」

「やめっ…っ……ふわっつあううっふわっ、き、汚いよお」  
大丈夫。たとえ、チ○ヨバットにうんち○ヨが付いてたとしても

さやちゃんのなら全然いける。むしろチ○ヨバットをコーティング  
するチ○ヨが増量するだけだからお得とも言える。

根元ですっぽり埋もれたのを確認して、一気にズルツと  
引き抜く。

「……あんっっ…っ…んっ…っ…んっ…っ…んっ…っ…んっ…っ…」

「ああっふわっあつううああっ」  
反復で徐々に最適化され、さやちゃんは感じ始めているのが  
声色でわかる。

「どう？ さやちゃん、なれてきた？」  
いじわるく、わざと質問すると、さやちゃんは身をよじりながら、  
恨めしそうに「うん…」と返事をした。

「ふわっあつ…あふわっあつ」

快楽に身をゆだね、抵抗が失せたのがわかる。  
マリオネットのようにされるがまだ。

「あっああっあ」

ゆさゆさと、腰を打ち付けるたびに

脱ぎかけの下着が風がそよぐように揺れる。

いつか、「豆くんがま〇んぐミで

めくった時とは違う柄のようだった。

「あんっ！」

さやちゃんが二際大きな声で鳴くと、そのまま全身の力が抜けて、  
空ろな瞳で天井を見上げていた。

「さすがさや師、飲み込みが早いわ」

「そういつて四つん這いではいよるほたるさん。」

「ぶらさがった乳房から性のうねりを感じる。」

「ほたる…ちゃん…」

「複雑そうな表情で、さやちゃんが応じる。」



「ほら、みんな来てくれたのよ、佐世保から大○くんも」

「駆けつけてくれて、それにカ○ルのお巡りさんも」

「いや、カ○ルのおまわりさん来ちゃったら現状逮捕されるだろうと」

「内心思ったが、何も言わないでおく。」

「…!! ほたるちゃん…」

「彼女はとうに正気を手放しているのだ。彼女も、そして僕も、それをさやちゃんは察したようで、回をつぐむ。」

大きい星がいたり消えたりしている。

快楽の海に沈んだ竜宮城は、終わらない永遠の夏の間、宴を続けていた。

これでいいのだ、これで。だが、しかし。

「それは、間違ってるよ、さやちゃんが言う。」

「これじゃダメなんだよ、ヨコソツ」

ここは何でも望みがかなう世界。優しい世界。今日という刻に、いてはならない世界。これでいいわけがない。

くしゃりと、ビニール袋のマスクを取り外し、外界を視る。





視界がぼやける。

世界の終わりだ。

何者でもなくなるのは、少し心が痛むけど、とても楽な生き方だ。名前を背負うのは、責任が付いて回るから。

でも、それじゃあ、

誰からも自分を愛してもらえないわけがないのだった。

「ヨノツ君、ヨノツ君」

名前を呼ばれる。

「ヨノツーヨノツうてば」

聞こえる。名前を呼ばれてる。

「ヨノツー」

わかってるよ、すぐに行くよ。

暑っ苦しいなあヨノ。出られないのかな？

おい、出して下さるよ。

ねえ！

「跡継ぎになーる…跡継ぎになーる…」  
「こ、こい…び…とになーる…これ本当に催眠術かかっているの？  
なんか笑ってて気持ち悪いんだけど」

「うーん失敗したのかしら…  
いきなり気を失ったから成功したものだど  
思ったんだけど…跡継ぎになーる跡継ぎになーる！」

「ほたるちゃん…もっさいよ、  
いいから、『コノツ起こそっ』」

「ほら、起きてー」  
「コノツッ！」



どろ志ろ志  
サイケデリック  
コウイシヨウ

おしまい